

〔寿椿〕

ワキ／これは表きよしと申す学者にて候。さても亡き父表章は能楽研究の泰斗と称され、業績あまたある中にも、味間の補巖寺に世阿弥参学の跡を見つけしことは忘れがたく候。我もまた父にならい 能楽研究を専（もっぱ）らといたし候

今日は世阿弥の事績と題して 田原本にて講演仕り候

かくて我が父表章は 畏友香西精（いゆうこうさいつとむ）先生の御導きに

味間の補巖寺に 世阿弥参学の跡を発見いたして候

ワキツレ／香西精先生は、在野の碩学なりしが

ワキ／父は先生の学徳を慕ひ、ともに学問の最前線を切り拓きて候

ワキツレ／その後有縁の人々相集ひ、世阿弥参学の碑を建立す。

ワキ／今に新暦八月八日をもつて世阿弥忌を修する習ひなり。

本日の講演つつがなく相済み候間、聴聞の人々をも語らひ、これより補巖寺へ参詣申さばやと思ひ候。

皆々御覧候へ。これこそ世阿弥参学の碑よ

わづかに残る山門に一山の栄華偲びがたしと雖も、碑に添ふて椿の木あり、駘蕩たる春風に花は開きて微笑むがごとし、あはれ世阿弥の妻の名にある花にて候よ。

ワキツレ／寿椿の御事にて候な。最前の御講話の如く 今一度お聞かせ候へ。

ワキ／能楽の太祖世阿弥、娘婿金春禅竹に宛てし書状二通残り。一通は配所の佐渡より寿椿扶持の礼をも述べ。今一通に「ふかんじ二代の仰せ」とあるが詳らかならざりしが、香西精先生、これこそ開山了堂和尚を継ぎし竹窓和尚、寺は味間の補巖寺と突き止められて候よ。亡父感に堪へず補巖寺を訪れ、古き納帳四冊の中に「至翁禅門 八月八日」これなる文字を見出し、世阿弥の法名紛れもなく、八月八日ぞ忌日ならんと欣喜雀躍せしと言ふ。香西先生喜び給ひ、同じき古き納帳に寿椿禅尼の名を得給ふ。

ここに補巖寺に追善の田を寄進せし夫婦の法名揃ひしは、世阿弥参禅の揺るがぬ証拠よとて、能楽研究の画期を成す、今に聞こえたる快挙なり。

表きよし「私は表きよしという学者です。亡くなった私の父は表章という名で、とても有名な能楽研究者でした。たくさん成果をあげましたが、中でも味間の補巖寺で世阿弥が禅を学んだ事を発見したのは忘れられない大きな成果でした。

私も父と同じく、能楽の研究を専門にしています。今日は「世阿弥の事蹟」という題名で田原本で講演をいたします。

表きよし「そうして私の父、表章は、尊敬する友人でもある香西精先生に導かれて味間の補巖寺で世阿弥が禅を学んだことを発見したのでです」

参加者「香西先生は民間の大研究者だったということですが」

表きよし「父は先生の研究の素晴らしさを尊敬していて、ふたりは協力してたくさんの大発見をしたのです」

参加者「その後補巖寺の発見に感激した人々が集まって、世阿弥参学の碑を建立しました」

表きよし「今は新暦八月八日、世阿弥の命日に補巖寺に集まり偲ぶ習慣となっています」

今日の講演は滞りなく終わったので、参加された皆さんと一緒に補巖寺にお参りしようと思います。

皆さん、ご覧ください。これが「世阿弥参学の碑」です。

寺は山門くらいしか残っていないと、昔の繁栄は想像もできない有様ですが石碑に並んで椿の木があります。のどかな春風に揺れて花が微笑むように咲いています。ああ、これは世阿弥の妻の名前の花でした。」

参加者「寿椿のことですね。先ほどのご講演のように、もう一度お話ください。」

表きよし「能楽を完成した偉人世阿弥が、娘婿・金春禅竹に送った手紙が二通残されています。一通は流刑地、佐渡からの手紙で、寿椿の面倒をみてくれていることへのお礼が書かれています。もう一通の手紙に「ふかんじ二代の言葉」と書かれています。が誰のことかずっとわからなかったのですが、香西精先生が、補巖寺を開いた了堂和尚のあとを継いだ竹窓和尚のことであり、ふかんじとは、味間の補巖寺だときとめられたのです。父は感激して補巖寺を訪ね、古い納帳を四冊見つけ、その中に「至翁禅門八月八日」と書かれているのを見つけ出しました。それは間違ひなく世阿弥の法名（出家名）であったので、八月八日が世阿弥の命日に違ひないと、小躍りするほど歓んだということ。香西先生もこの知らせに喜ばれ、続いて補巖寺を訪れ、同じ納帳の中に、世阿弥の妻・寿椿禅尼の名を見つけられたのです。こうしてこの寺に、死後の供養のための田を寄進した夫妻の法名が並んで見つかったのは、世阿弥がこの寺で禅宗を学んだ確かな証拠であるということで、それは能楽研究の新しい幕開けと言えるほどの、重大な発見として注目されたのです。」

ワキツレ／＼げにまこと奇縁なるかな、ありがたや

ワキ／＼大和路の風も光も懐かしく、これぞ世阿弥の跡なりと  
一同感を催すところに

地謡／＼虚空に妙なる音楽聞こえ、異香薫じてただならぬ折から、  
花の精霊現れたり

地謡／＼椿葉（ちんよう）の影再び改まる、松の花も十廻、見る  
たび飽かぬ花の色々

### 子方の舞

シテ／＼日に磨き風に磨く千顆万顆の玉椿、げに面白き舞歌の曲

シテ・子方／＼後の世の人の心の花なれや

地謡／＼毎年忌日のおん参り、ただありがたく懐かしくこれまで  
現れ出でたるなり。この報恩に見給へや、我は寿ぐ花椿、まこ  
との花の姿ぞかし

ワキ／＼色々の花の中より踊れて、光添へたる装ひは、寿椿禅尼  
にましますか。その玉衣（たまぎぬ）の綺羅なるに袈裟を掛け  
たる御姿

シテ／＼これなる衣こそ、世阿弥の召されたる舞の装束にて候よ。  
世阿が形見に御覧候へ。いざやものまね舞ふてみん

ワキ／＼あらありがたの御ことや。補巖寺供養の功德にて、夫婦  
ともども仏果を得、成仏得脱疑ひなし。また椿とは、椿堂とて、  
父なる木とも申すなり。げにや我が父表章も、今ここに共に奇  
瑞に遇ふならば、いかに嬉しきことならんと、思へば落つる涙  
かな。

参加者「なんとも不思議な巡り合わせだったのですね。ありがた  
いことです。」

表きよし「昔々、ここで世阿弥が禅を学んだ足跡があり、昔の大  
和路も、今日のようにのどかな春風と陽射しに包まれていたのだ  
ろうかと、一同しみじみ感動にひたっていたところ…」

地謡 空から美しい音楽が聞こえ、とても良い香りがただよい、  
ただ事ではない雰囲気の中に椿の花の精が現れます。

下がり端・幸せを運ぶものが現れる時の曲にのって椿の精が登場

地謡 八千年間春が続くという伝説の椿に再び春が廻ってくる  
ほど永く。千年に一度咲くという松の花が十回廻るほど永く、こ  
の世の寿福が続くようにとの人々の祈りが、色とりどりの椿の花  
葉となつて、どれだけ見ても飽きることはない程美しい舞姿を見  
せる。

寿椿の霊「陽光に磨かれ風に磨かれて、輝くような美しい花葉が  
微笑み、宝石のような実の成る椿の木。春の日に揺れる姿はまる  
で精霊が舞っているような素晴らしさ。」

寿椿・椿の精「昔を偲び、大切に思つて下さる方々のお心にひか  
れて…」

地謡 毎年世阿弥の命日にお参り頂いていますこと、とても嬉し  
く、また私達も昔を懐かしく思い、皆様の前に現れたのです。感  
謝のしるしに世阿弥が残した真の花をお伝えするため、世々を寿  
ぐ（言祝ぐ）椿の花の姿をお見せするのです。

表きよし「色とりどりの花葉の中から一層輝く衣装で現れて、寿  
ぐ椿ということは、世阿弥の妻・寿椿禅尼さまなのですね。輝く  
ばかりの美しい衣装に、袈裟をかけていらっしゃる。」

寿椿の霊「これは世阿弥さまが身につけて舞われた形見の衣装な  
のです。さあ、夫の舞を思い出して同じように舞つてお見せしま  
しょう。どうぞ世阿弥さまを偲ぶようにご覧ください。」

表きよし「なんとありがたいことでしょう。補巖寺での毎年の供  
養により、夫妻ともども仏となつて浄土にいらっしゃることは間  
違いありません。また、椿の姿とおっしゃいましたが、椿と言え  
ば椿堂（父親の書齋）という言葉があつて、父を表す木とも伝え  
られることを思い出しました。本当に私の父、表章が今ここで、  
この奇跡と一緒にあつていたなら、どれほど嬉しかったかと、思  
えば涙がこぼれます。」

シテ四季折節の時の花、いずれの花か散らで残らん、さりながら椿こそ八千歳（はっせんさい）の、春を寿ぐ花なれば、年々去来の花なれど、散らで残りしまことの花に

**地謡**／類（たぐ）へむことは秘すべしや、秘すべしや、秘すれば花、秘せずは花なるべからず

シテ／心より心に伝ふる花なれば

#### 序之舞

**地謡**／心に伝ふる花なれば、心に伝ふる花なれば、風姿花伝と名付けて、道の奥義を説き給ひ、まことの花に至りしは、至翁禅門世阿弥陀仏、懐かしやこの寺に、寿椿禅尼も翻す法の衣の玉椿、雪かと思えし花の白妙、照り葉も緑濃く変はらぬ色に栄ゆくや、遊樂の道ぞ久しき、遊樂の道ぞ久しき。

〈詞章・現代語訳〉 山下あさの（観世流能楽師）

**寿椿の霊**「四季折々に華やかに咲く花。けれどすべての花は散るさだめでしょう。人間も同じ。散らない命はないのですから…。けれども伝説の大椿は八千年間の春を過ごしたといえます。

春ごとに咲いては散る花は、実は毎年同じではなく、年々異なる美しさで咲いているのです。その美しさを忘れず身心に備え続ける努力によって、木の命が尽きても、人の心に残る本当の花を残すことができるという世阿弥の芸の教えにある「まことの花」に、椿の花をたとえることができる…お父上もまた、たゆまぬ努力で「まことの花」を咲かせたのだと…」

**地謡** これは、ひそかに伝える、内緒のお話。大事なことは、大事なときに、大事なひとに、そつと伝えなければなりません。心から心へと、伝えなければなりません。

#### 寿椿の霊・序の舞

**地謡** 世阿弥は心から心に伝える感動を「花」と呼び、受け継がれる伝統を「風」にたとえて「風姿花伝」と名づけた著書に、能の道の重要事項を書き残されました。命が尽きても咲き続けるという「まことの花」の境地に至り、歌舞の道の仏となったのは、まさに世阿弥その人。法名は「至翁禅門」。ああ、懐かしい我が夫。あなた様の魂が宿るこの寺に私も再び現れて、仏さまの繋いでくださる美しいご縁に感謝の心を表して、永遠の幸福を祈る舞を、清らかな衣をひるがえして舞いましょう。聖なる椿の花は雪のように白く、春の陽射しに輝く濃緑の椿の葉は枯れ落ちることなく豊かに繁り、未永く受け継がれてゆく能楽の道を見守っているのです。